

第4回 学校運営協議会 議事録

- 1 日 時 令和8年2月17日(火)
- 2 場 所 御殿場特別支援学校 会議室
- 3 出席者 学校運営協議会委員
前小山教育長(CO) 高橋 正彦 様
トヨタ自動車(株)東富士研究所管理部 細井 敏光 様
時之栖 社長室 加藤 弘一郎 様
(福)御殿場市社会福祉協議会 常務理事事務局長 鎌野 晃 様
御殿場市企画戦略部未来戦略監兼未来プロジェクト課長 勝又 喜英 様
富士見原区 福祉支部長 小山内 君子 様
PTA代表 伊藤 偉厚 様
本校校長、副校長、教頭、事務長、各学部主事、教務課長、連携課長
生徒指導課長、生徒指導主事 計16名

4 議事録

(1) 校長あいさつ

これまで4回の協議会を通じて、委員の皆様から丁寧な支援やアドバイスをいただいたことに深く感謝している。現在、来年度の教育課程を検討しているが、学校内部だけでは気付けない視点があるため、評価や意見をいただきたいと考えている。



(2) いじめ防止対策拡大会議

○学校生活アンケート結果と分析

児童生徒の学校生活の満足度については肯定的な回答が多く、学校生活を楽しく感じている様子が伺える。また、身近な大人(教師や家族)が相談者として機能していることも確認された。具体的なトラブルについては教師が対応しており、大きな案件につながるものはなく、いじめ発生件数は0件だった。また、教職員は、安心できる雰囲気づくりや、子どもを多面的に理解することなどを大切にしている。

○委員からの意見

- ・いじめ0件という結果に安心する一方、成長に伴い個性も出てくるため、苦手な人とどのように付き合っていくか、社会に出るための対人スキルを身に付けられるとよい。
- ・子どもへの支援だけでなく、教職員同士の関係性が手本となるよう高め合っていくことが重要。教職員が日頃から子どもたち一人ひとりと丁寧に関わっていることが、いじめのない環境づくりの一因になっている。
- ・教師の傾聴の姿勢が印象的であり、正解のない中で前向きに取り組んでいる。現在の良好な状況を維持しつつ、将来の社会生活を見据えた人間関係の構築力や立ち向かう力、SNS時代に対応した情報リテラシーを育む教育ができるとよい。

(3) 令和7年度コンプライアンス委員会報告

単に「不祥事を起こさない」と唱えるだけでなく、良好な職場環境や人間関係を作ることが不祥事の未然防止につながるという考えで研修を実施した。来年度は、アサーションをキーワードに、コミュニケーションスキルを高め、より良い職場環境づくりを継続する。不祥事が起こり得ない組織づくりと教職員の意識改革の両面から、学校づくりに取り組んでいく。

○委員より

マイナスを消すだけでなく「プラスを増やして学校を良くしていこう」という前向きな姿勢がよい。教職員の関係性が子どもへの教育に直結する。

(4) 令和8年度学校運営協議会について

○基本方針と目標の明確化

学校教育目標や合言葉、および具現化の柱は変更せず、成果目標（行動目標）をより具体的で分かりやすい形にする。これにより、教職員だけでなく、児童生徒や保護者も自分たちのこととして関わられるようにすることを目指す。

○「ふじはぐプロジェクト」の深化

ふじはぐシートを活用し、学校の授業づくりや教育課程を地域住民や委員にも分かりやすく提示することで、協力・参画しやすい学校づくりを推進する。また、教職員がチームとして働きがいを持ち、組織的に機能する体制を整える。

○教職員の環境整備とコミュニケーション

- ・コンプライアンスおよび研修のキーワードとして、自分も相手も大切にする教職員の自己表現を高める。
- ・来年度から県内で始まる生成AIを活用した書類作成支援などを積極的に導入することで、事務作業の時間を短縮し、子どもと向き合う時間や教職員同士の対話を確保することに重点を置く。

○安全対策と未然防止の強化

- ・命を守る取り組みとして、日々の学校生活におけるヒヤリハット情報を、リアルタイムで共有し、事故の未然防止につなげる。

○運営協議会委員への期待

- ・地域とのつながりをさらに深め、子どもたちが社会に立ち向かう力を育むための体験学習の充実により一層取り組んでいく。

(5) 意見・感想

- ・障害のある子どもたち一人ひとりに向き合う教職員の多忙さと、その中でのきめ細かな配慮や尽力に対し、感謝する。教職員が研修を通じて知識をアップデートし、前向きに取り組んでいる姿勢が印象的である。
- ・体験学習は、子どもたちの記憶に残り成長につながる価値のある取り組みである。また、駒門パーキングエリアなどの地域と連携し、子どもたちの作品が実際に使われたり交流したりすることで、知ることやつながりが深まっていることは評価できる。
- ・生成AIなどの最新技術を活用して事務作業を効率化することで、子どもの良さや長所を伸ばすための触れ合いに時間を割き、教職員が仕事に埋もれることなく心のゆとりをもって、子どもに接することができる環境づくりを継続してほしい。
- ・教職員個人の使命感だけに頼るのではなく、組織やシステムとしてより良い教育を実現し、教職員自身も成長できる体制を整えている点がよい。
- ・学校の活動を通じて、子どもだけでなく保護者や地域住民も共にアップデートしていけるような、充実した場になっている。



(終了)